

論文内容要旨

題名：訪問看護を利用している終末期がん患者の在宅看取りに関連する要因

専攻領域名：在宅ケア・マネジメントと医療施設ケア領域

氏名：藤澤真沙子

内容要旨

【目的】訪問看護ステーションを利用している終末期がんの療養者を対象に在宅看取りを可能にするためには何が影響しているか明らかにすることを目的とする。

【方法】対象は2013年4月～2017年3月までにA訪問看護ステーションを利用した者の内「末期がん」と診断され利用を終了した者の看護記録とした。データは看護記録より情報収集した。在宅看取りを行った者と訪問看護の利用を中止した者を従属変数、患者属性、介護者の状況、ADL・身体状況社会資源等を独立変数とした。名義尺度は χ^2 検定、連続変数はt検定を行い在宅看取りと有意差が出た項目を抽出後、多重ロジスティック回帰分析を行い在宅看取りとの関連要因を検証した。本研究は昭和大学保健医療学部倫理委員会の承認を受けた（番号：391）。

【結果】分析対象者は865名（在宅看取り674名：78.0%、病院または施設での看取り191名：22.0%）であった。 χ^2 検定の結果在宅看取りと有意な関連がみられたのは高齢である、主介護者の存在、主介護者の就労が無い、ADLの移動・食事・排泄・入浴・着替え・整容で介助が必要、おむつを使用している、寝たきり度が高い、訪問診療とつながっている、住まいが一戸建・持ち家、であった。t検定では訪問看護利用期間では有意差が認められた。多重ロジスティック回帰分析の結果65歳以上である（オッズ比〈OR〉=6.2 [95%信頼区間1.9～20.3]）、訪問看護利用開始時入浴で介助が必要である（OR=3.1 [1.1～8.6]）、訪問看護利用開始時訪問診療とつながっている（OR=2.7 [1.0～7.3]）、住まいが持ち家である（OR=4.0 [1.5～10.7]）ことが在宅看取りと関連がみられた。

【考察】本研究において在宅看取りと関連する4つの要因が明らかとなった。この結果より、終末期がん療養者の急速な病状悪化に対応できるように早期に医師と連携を図り医療提供できる環境を整え不安の軽減を図ること、住む場所での近隣との関係性や介護者の負担を軽減できるよう支援していくこと、また特に年齢が若い療養者の場合には間近に迫る死を受け止めきれず揺らぐ気持ちを理解し関わっていくことが、訪問看護ステーションを利用する終末期がん療養者にとって必要である可能性が考えられる。